

広開土王碑

佐藤 良士

広開土王碑は、高句麗の広開土王（在位392 - 413）の事績を後世に残すために、同王を埋葬した414年に王都・国内城の東郊（現在の中国の吉林省集安市）に建てられた石碑である。碑文は三段から構成され、一段目は高句麗の開国伝承と建碑の由来、二段目は広開土王の業績を紀年記事で表し、三段目は広開土王を葬った陵墓の守墓人についての規定である。

広開土王碑は高句麗を中心に4～5世紀の東アジアについて記載されており、それだけに碑文に対する見方も多様で、碑文の解釈を巡って多くの議論を呼んだ。

碑文の史的価値 広開土王碑文は高句麗と「倭」の攻防、交渉が生々しく語られている。ところが不思議なことに朝鮮の史書「三国史記」の高句麗本紀には、高句麗が百済を攻めたことが記されているが、肝心の倭は登場しない。またわが国の日本書紀では、神功紀、応神紀の百済伝に、倭と新羅、百済等の朝鮮諸国との関係が見えるが、ここには高句麗が登場しない。倭の古代朝鮮半島における戦闘等の活動は、わが国の記紀や朝鮮の史書に多く語られているが、倭と高句麗との交渉を明らかにした碑文は、史書の空白を埋める貴重な資料といわれる。

碑文の改ざん説 碑文に登場する「倭」を日本とし、倭の勢力が韓半島に及んでいたと主張したのが、19世紀末の横井忠道、那珂通世らの日本の史学者達であった。その解釈が後に韓日併合の歴史的正当性の論拠となった。それに対して在日コリアンの史学者、李進熙（イジュ）が日本軍による改ざん説を主張した。現況では改ざんはなかったという説が強いが、問題の「辛卯（シンウ）年」の記述を巡っては韓日の歴史学者で意見が分かれている。

問題の辛卯年 とは、391年の「倭が海を渡って来て百済を破り、新羅を臣民として…」の部分である。欠字の解釈、文の解釈で「海を渡った」者が、倭と高句麗に大きく分かれる。原文を素直に読めば主語の「倭」が海を渡ったものになるが、前後の文章の分析から主語が省略されているというのが高句麗説の根拠になる。それには、総合的な歴史解釈も争点になるが、詳細は省略して両者の碑文解釈を紹介する。



「倭が辛卯年に海を渡って、百残（百済）、任那、新羅を破って、百残（百済）、任那、新羅を臣民とした」（倭説 = 主に日本の史学者）

「倭が辛卯年に高句麗に来ると、高句麗は海を渡って倭を破った。百残は倭と連合して新羅を侵して、新羅を臣民とした」（高句麗説 = 主に韓国の史学者）

高安の丘の上で 今回訪れた経済法科大学の「広開土王碑」は、朝鮮文化科学院（北朝鮮）から文化交流で贈られた複製品である。

広開土王碑は、1880年に当時の清の集安の農民によって発見された。以来古代と現代の謎を秘めて論争を集めてきたが、現在は風化、劣化を防ぐためにガラスケースで保護されている。集安は鴨緑江の近くである。大王の碑は大王が戦って勝ち取った広大な領土を見つめていたはずである。そこには大王の征旗をゆるがず風が吹いたはずである。丘の上の大王の碑は短命の大王を惜しむように、夕日に照らされていたはずである。ちょうど、この高安の丘のように……。

碑文と三国史記による「広開土王物語」

広開土王の活躍した時代の韓半島の情勢を碑文と三国史記で追ってみた。広開土王の治世はそれほど長くない。四十歳前後で死んでしまうからである。

太字が碑文で、他は三国史記から碑文に関係する部分を抜き出したもの。年毎の記事に多少の前後があるが、内容は矛盾していないのが分かる。

三国史記の高句麗本記には「倭」は登場しないが、碑文では高句麗に挑んだ最も重要な民族として描かれる。半島の覇者高句麗と謎の民「倭」の抗争。両雄に挟まれた新羅と百済の苦悩。ここに描かれている「倭」は驚くほど強大で、かつ勢力的であるが、広開土王に挑んだ「倭」とはいったい何者なのか。日本書紀に描かれる伝説の神功皇后か、それとも北部九州と韓半島南部諸国の連合体か、果たして彼らは広開土王に挑むために海を渡ったのか。謎の四世紀を追ってみた。

（参考資料）物語三国史（中公新書） 広開土王碑との対話（武田幸男著）



韓流歴史ドラマ「大王四神記」の主演タムドク（後の広開土王）のペ・ヨンジョン。草食系男子の代表のような「冬ソナ」のヒーローは勇猛果敢に戦った大王のイメージに遠いような気がしないでもないが、次頁は歴史に登場しないヒロインのスジン役のイ・ジア。彼女はこのドラマで抜擢されたんですが、その後は離婚騒ぎがあったりして、パツとしないようです。それにしても韓国の女優というのは皆同じような顔で、不思議です。

- 391年 百済と新羅は、元来高句麗王の属民であって朝貢していた。ところが倭は海を渡ってきて百済を破り、東方では新羅を侵して臣民にした。
- 392年 高句麗の太子、談徳は十八歳で父王の後をついで広開土王となった。高句麗が百済の十の城を攻略した。また百済のカンピ城を攻め落とした。新羅に高句麗から使者が来た。新羅は高句麗に実聖を人質として送った。
- 393年 百済が高句麗の南部に侵入したので、王は將軍に命じて防戦させた。倭軍が新羅に侵入して金城を包囲した。新羅王は城門を閉ざして持久戦に持込むと倭軍はやむなく退却した。新羅王は倭軍の帰路を遮断し大敗させた。
- 394年 百済が侵入したので、広開土王が騎馬隊を率いて迎え撃った。
- 395年 広開土王が百済と戦い大敗させ、八千余人を捕虜にした。
- 396年 大王は自ら軍を率い百済を討伐した。百済の王は大王にひざまずき、「今より後は末永く大王の奴客となりましょう」と誓約した。大王は寛大な恩をもって百残王が先に犯した迷妄の過ちを許した。こうして大王は百残の58城、村七百を獲得し、また百済王の弟と大臣十人を連行し都に凱旋した。
- 397年 百済が倭国と国交を結び、太子の腆支を人質として送った。
- 399年 百済は先にたてた誓約に叛いて、倭と和通した。大王は平壤に巡り下った。新羅は使者を立て大王に、「倭人は新羅の国境に満ちみちて、城池を巡らした要衝を潰し破り、他方では隣国の奴客（百済）を民としました。わが国は大王に帰服し、大王の命令を請いたいと思います」と言った。大王は新羅の忠誠を称え、特に使者を遣わした。
- 400年 大王が五万の兵を遣わして、進んで新羅を救援させた。男居城から新羅城に至るまで、倭は満ちみちていた。官軍がまさに到着しようとした時、倭賊は退去した。さらに急追し、任那加羅（みなまから）の城に至るや、城はたちまち帰服した。安羅伽耶（あんらかや）と倭の連合軍は壊滅した。新羅の王は広開土王に朝貢した。
- 402年 新羅が倭軍と国交を結び、王子末斯欣を人質に送った。
- 404年 倭は謀反を起こして帯方の界（西海岸）に侵入、大王は官軍を率い親征して倭の船団を破った。倭寇は潰え敗れた。
- 407年 大王が、歩・騎五万の大軍で南を攻め大勝した。捕獲した鎧鉀は一万余領に達し、軍資、器械に至っては数え切れないほどであった。軍を返す時に五つの城を破った。
- 407年 倭人が新羅の東部に侵入。また南部の辺境を犯し、百人の民を奪った。
- 412年 新羅が人質で王子ト好を高句麗に送った。
- 413年 冬十月、広開土王が薨去した。

